

中国現代京派文学研究六十年国際学術研討会 についての一報告

小島久代

2009年11月7日に開催された「中国現代京派文学研究六十年国際学術研討会」について、筆者はすでに2010年2月18日30年代研究会で口頭報告を行った。だがその後『文学評論』2010年第2期に龔敏律氏による総括的報告「中国現代京派文学研究六十年国際学術研討会綜述」と黄媛玲氏の「沈從文研究の現在—中国における研究状況—」『野草』第86号（2010年8月）が発表されたので、今回は両氏の報告も参考にしながら、初めて開催された中国現代京派文学研究シンポジウムに招聘された者の一人として、一文を草して報告とする。このシンポに筆者は名古屋外国語大学の黄媛玲さん、九州産業大学の呉紅華さんの三人で参加した。出席者は1000字内の発表要旨を送らねばならず、筆者は2009年4月のお茶大中文学会で発表した「最近の日本における沈從文研究」¹⁾を、若手研究者の研究に焦点をしぼってまとめ、中文に訳して送信した。湖南師範大学は長沙市岳麓山にある。筆者にとっては25年振りの再訪であり懐しかったが、11月6日CAの上海経由で、夜8時過ぎに長沙空港に着いたため、変貌振りを見ることはできなかった。

7日の学会は同大学文学院紅樓（国際会議センター）2階216号室で開かれた。学会のスケジュール表及び発表者・発表題目は以下の通りであった。

8：30—9：00 大会開幕式 司会：凌宇、挨拶：党書記張国驥、文学院院长譚桂林。
集合写真撮影。

9：00—10：15 大会第一部学術報告 司会・コメンテーター：温儒敏、周曉明。
発表者：陳国恩「論京派文学的時代性与超越性」、黄万華「京派的“終結”和戦後中国文学的転型」、楊洪承「“京派”与中国現代文学社群研究的思考」、許祖華「京派研究的魯迅背景」、李永求（韓）「京派作家在韓国的研究概況」、王本朝「京派文学与中国現代的審美主義」、周仁政「中国現代文化史視野中的京派和京派文学」。

10：30—11：45 大会第二部学術報告 司会：羅成琰、何錫章。

発表者：小島久代（日）「日本近期的沈從文研究」、趙学勇「1979—2009：沈從文

の幾個關鍵詞、鄒紅「京派文人和中国現代戲劇」、依内莎（モルダビア）『「辺城」感想』、沈衛威「林語堂、梁実秋与“学衡派”の疏離—永恒的人性与人性的二元」張森「沈從文研究六十年的回顧与反思」、徐德明「在京派的框架中評價老舍？」、王攸欣「論朱光潛之學術人格」。

14：30—16：00 大会第三部學術報告 司会・コメンテーター：呉福輝、趙樹勤。

発表者：袁国興「沈從文：“好人悲劇”和“類宗教”意識」、宋劍華「精英作家還是通俗作家」、呂周聚「論沈從文小說中人性惡的表現」、張全之「正名・拓展・深化—改革開放30年沈從文研究的回顧与反思」、楊琳「沈從文散文化小説的叙事策略」、張文東「《辺城》の伝奇叙事—重読《辺城》兼論沈從文小説叙事中的“中国經驗”」、席建彬「欲望釈放中の性別叙述—論沈從文小説的欲望詩化形態及文学史意義」、李惠任（韓）「論沈從文湘西題材小説中の原始信仰」

16：15—17：35 大会第四部學術報告 司会：王保生、王確。

発表者：黄媛玲（日）「論《篁君日記》兼論沈從文作品的“現代性”解読」、呉紅華（日）「論周作人对明末思想家李卓吾の評價」、湯哲声「“老舍之路”与中国現代文学創作觀的思考」、賀仲明「在伝統中間尋找異路—廢名的方法学意義」、呂若涵「“頹廢”如何現代？—以20世紀30年代小品文論争為中心」、李洪華「“水”与“火”的見証—魯迅、沈從文“兩地書”比較闡釈」、李永東「從上海走出來的京派作家—論沈從文創作風格的形成与租界文化語境的關係」、王鴻莉「節令演説与北京想像」。

17：35—18：00 閉幕式 司会：譚桂林、総括：凌宇。

掲載論文を分類すると、京派(7)、沈從文(11)、周作人(2)、魯迅と沈從文の比較(2)、小品文、梁実秋などについて(2)、老舍(1)、朱光潛(1)、穆旦(1)、廢名(1)、その他(1)となり、作家研究では圧倒的に沈從文が多いのがこの学会の傾向を示していると言えよう。さて、上記のように、75分間に7～8人が発表し、温儒敏、呉福輝、凌宇氏のコメントが入るため、一人当たり平均8分ぐらいの制限時間内の発表であり、予稿集の該当論文を追うだけで精一杯、内容を把握するところまでいかず、30年代研究会で報告するために予稿集を読み直して初めて理解したようなわけである。

龔敏律氏は学会の発表とコメンテーター三氏の発言を①京派文学とはなにか、②京派文学研究の歴史的回顾と反省、③京派の具体的作家の作品研究、④沈從文研究の回顾と反省の4点に分けて全員の発表と発言内容を要領よく簡潔にまとめている。また、黄媛玲氏は沈從文研究に絞って張森氏と趙学勇氏の二人の発表を簡潔にまとめてくれている。

中国現代京派文学研究六十年国際学術研討会についての一報告

凌宇・周仁政という二人の沈從文研究者を擁する大学で開催されただけあって、京派文学研究といっても沈從文に関する発表が多いというのが筆者の第一印象であった。そこで、筆者は龔敏律氏の報告を参考にしつつ、30年代研究会における報告を基に①京派文学、②沈從文、③朱光潜・周作人に関するものの三つに分け、関心をもった論文を取り上げ報告したい。

①京派文学について：第一部の全て及び第二部の3がそれに当たり、1920年代から始まる京派文学の辿った盛衰を時代背景と結び付け、とりわけ1949年を境に前後に分けて整理し、文学傾向とその主張を論ずるものが多かった。

具体的には楊洪承（南京師範大学）が中国現代文学史における京派や七月派などという流派研究に存在する「命名の困惑」について述べ、流派と社団の違いに注目して、流派は文学の審美そのものの生命追求を主目的とするのであって、明確な旗印、活動拠点、規則を持つ社団とは異なると指摘する。また、流派研究においてはその豊かさと複雑さに注目し、人（個人とグループ）と事柄、考え方、運動思潮、歴史の起伏などの絡みに注目し、またその不確定さが常態であることにも注目すべきだという。

陳国恩（武漢大学）は京派文学の歴史を振り返り、その時代性と超越性について述べる。陳がいう“時代性”とは、時代精神とか時代の特色とかいうものではなく、時代の選択を意味するという。京派文学が30年代において左翼文学との間に矛盾と衝突が生じたこと、また1949年後の30年間においても寂寞に遭遇し批判される運命を辿ったのは歴史の必然であったとする。さらに80年代以降混乱の收拾と秩序の回復に伴って、京派文学の芸術成果と美学観念が受け入れられるようになったのも、歴史の要請であり、左傾思想を一掃しようとした必然的結果であったとする。また、超越性については、人間性の真実を描き出し、あるべき深みに達してさえいれば、千年後の読者が読んでも、読者の人生経歴ないしは体験からその中に含まれる意味を読み取ることができると述べる。だが、現在の文壇はすでに通俗文学が流行し、映画とテレビの作品、ホットな話題やインターネットゲームの流行などにより、優れた文学は周縁に退き、京派文学の影響範囲も縮小していて、力も以前ほどではなくなっていると述べ、京派文学の現在に至るまでの歴史を回顧している。

周仁政（湖南師範大学）は中国現代文化史の視野から京派と京派文学をとらえる京派文学史の構想を述べる。彼は京派の文学史の位置付けをその文化史の位置付けに基づいて行い、本質的には現代性（モダニティー）の追求と関係があるとする。現代性の文化追求は主に知識人の非政治性の選択によって、自分の文化的理想を際立たせたとする。

つまり、文化においては依存性の代わりに自主性を、政治の目的化の代わりに自我の本質化を、文学においては道徳性の代わりに人間性を追求し、反進化論の思惟方式と価値理念によって、民族性を具えた文化土壌の中から“人類性”の特徴を具えた文化価値の内包を執拗に掘りおこすことであったとする。彼は1933年の京派・海派論争を境として、前期京派と後期京派に分ける。前期京派の中心となったのは周作人・廢名であり、後期京派の主体は朱光潜・沈從文であり、西南聯合大学時期の馮至・穆旦・梁宗岱の“新詩現代化”の実践も京派文学と見る。また、京派文人が選択した審美主義は五四時期の蔡元培、胡適、創造社に源があり、また、周作人や徐志摩ら新月派の影響も見られるとする。

この第一部のコメンテーター温儒敏氏は、京派文学は創造社や湖畔詩社に比べると、共通の文学観、文学主張、文学活動に欠けていたため、まとまった流派ではなかった。それ故京派の範囲を拡大すべきではないとして、西南聯合大学の馮至を京派研究の中に加えることについては、考えなければならぬと述べ、また、京派文学が北方文壇を代表し得るかどうか、京派は小説流派であるか総合的流派であるか、詩人の下之琳、劇作家は京派かどうかについては再考する必要があるとコメントした。また、宋劍華（暨南大学）は京派文学の命名や純文学と通俗文学との関係、北京出身の作家である老舎がなぜ京派の外に排除されているかなどの問題についての疑問を述べたのに対して、呉福輝（中国現代文学館）は『中国現代文学三十年』の編集執筆の経験から、“京派”という名称の生まれた歴史を振り返り、また、自由流派、人間関係、大物作家は派に入れれないという三つの面から、文学史編纂の過程では老舎を京派に入れなかったと説明していた。また、彼は海派文学に比べると京派文学の研究は全体的に弱いし、京派文学の中でも沈從文研究は盛んだが、その他の京派作家・作品の研究は弱いので、このような学会を続けて開く必要を説いた。

②沈從文研究について：90年代以降急速に研究が盛んになってきているようで、主に第二部、第三部での発表のほとんどが沈從文研究であった。その中で沈從文研究を回顧する発表として、張森（武漢大学博士後）、張全之（曲阜師範大学）と趙学勇（陝西師範大学）の論文がある。前二者の論文が時系列に沿った整理であるのに対し、趙学勇はキーワードをいくつか挙げてそれに沿って整理している。趙学勇によれば、沈從文研究の論文は29000余篇に達するという。彼は1979年から2009年の30年の研究成果を「牧歌情緒」、「生命観」、「文体作家」、「郷下人」、「現代性」などのキーワードによって整理している。「牧歌情緒」については、最初に指摘した劉西渭（李健吾）の「「辺城」与「八駿図」

から夏志清の『中国現代小説史』を経て、近年の劉洪濤の『『辺城』：牧歌与中国想像』（2003）に至る研究史を振り返り、劉洪濤が「沈從文研究における文体とテキスト内容との切り離すことのできないつながりを明らかにした」として評価した。／「人間性」については、凌宇の「沈從文小説的傾向と藝術特色」（1980）が政治的な障壁を突破した画期的な研究であったと評価し、呉立昌の『沈從文作品欣賞』（1988）、『沈從文—建築人性神廟』（1991）、『人性的治療者：沈從文伝』（1993）がそれに続き、人間性の複雑さを分析したとする。／「生命」については、沈從文の「美は生命にあり」という命題を凌宇が『從辺城走向世界』（1985）以来一貫して追究して、「苗—漢文化衝突の最も際立った要素として、沈從文の生命哲学の成立過程における決定的な役割を果たした」と論じ、また、向成国の『回帰自然と追尋歴史—沈從文与湘西』もやはりこの命題について一章を割いて論じていること、及び趙学勇自身の『沈從文与東西文化』（1990）も沈從文の“生命”哲学意識が西欧の“生命”哲学思潮と強く共鳴していることを論証したとする。／「現代性」（モダニティー）については、近年“民族国家想像”というテーマでホットな論点になっているが、早くは蘇雪林の「沈從文論」が取り上げ、凌宇は「從苗漢文化和中西文化撞擊中看沈從文」（1986）において、沈從文及び彼の作品を苗漢と中西の文化遭遇、衝突、融合の中で考察し、「苗漢両民族の矛盾と対立を最も際立った要素として重要な役割を果たさせている」「民族的蔑視に遭い続けた南方の少数民族の孤独感が、自分の民族生存の道を歩ませることになった」という指摘を評価している。近年劉洪濤や呉曉東などが沈從文小説における「民族国家身分アイデンティティー」の考察を行い、劉は『『辺城』：牧歌与中国形象』（2003）において「『『辺城』は近現代以降の文化保守主義思潮が文学上で抽出されたものであり」、『『辺城』の牧歌属性与中国形象は表裏を成していて、後発国家が近代化されるのに応えるために、経典的なモデルと情緒を提供した」を引用し、また『沈從文小説新論』（2005）では、「西欧文学の中の異族想像との中の密接な関連を示している」とし、「『牧歌』で“中国形象”を“詩化”し、“暗喩”の方式で沈從文の“辺城”の想像を構築した」という指摘は斬新だと認めながらも、沈從文の初期の小説が主に都市を題材にしていることを考えると、都市を題材にした小説からは、別の中国形象が生まれるのではないかと問題提起する。また、劉の論は沈從文の少数民族血統の身分を薄めているのではないかという点と沈從文の小説の中の民族身分の追究を西欧のモダニズム文学の異族想像に結びつけるのか、それとも沈從文自身の民族問題に対する現実的思考に基づくのかと疑問を呈している。また、呉曉東の『『長河』中的伝媒符碼—沈從文的国家和現代想像』（2003）が「二種類の輿論空間—郷土のメディアと現代メディア

記号」という道具のみで説明するのは『辺城』以前の沈從文の“現代”に通じる出路を一概に否定するだけでなく、沈從文の絶対多数の作品の“現代”に通じる出路を封殺しているのではないかという疑問を呈しつつも、劉洪濤、呉曉東の研究は多角的な研究の可能性を開拓したとして評価している。／「文体作家」については蘇雪林、夏志清、凌宇などが論じているが、王曉明の「“郷下人”の文体和城里人の理想—論沈從文の小説創作」(1988)は「文体の変化は一つの信号であり、それは沈從文の審美的感受の全体が変化していることの現れである」を引用して、沈從文の創作の歴史及び心理的变化を解説したと評価している。また、「物語論」による研究として劉洪濤の「沈從文与現代小説的文体変革」(1995)を取り上げ、劉は沈從文が文壇で流行している“小説”と自分の“物語”を区別して、その独創性を強調していることに注目して、沈從文の小説の叙事は「客観原則を重視して、啓蒙的言説を脱構築した。これは五四を反省する具体的成果であり、中国の小説のさらなる近代化のために道を切り開いた」と述べたのを評価する。さらに劉が『辺城』与牧歌情緒」(2001)「沈從文小説的時間形式」(2005)において、ジュラル・ジュネットの「物語論」を援用して、『辺城』の“反復叙事”という文体特徴を提示し、前者では「沈從文は反復叙事を通して、個体を類に還元し、現象から規則を発見し、特殊を普遍に引き上げ、経験と人事はこのような抽象を通して、流動する時間の侵蝕の中から抜け出して、習慣、風俗、文化に変化し、永遠に達するのだ」とし、後者では“物語時間”に重点を置いて沈從文の叙事特徴を検討し、“反復叙事(括復法)”を借りて、“地誌小説”の文体を生み出したという指摘も評価している。類似した研究として裴春芳の「同質因素的“反復”—沈從文小説的叙事話語分析」(2004)を挙げて、このような物語論による沈從文の小説文体の分析は深められるべき道であるとする。

沈從文の上海時代の創作について発表したのは李永東(西南大学)である。李は沈從文が上海の租界に移住したことにより、中国の治外法権下の租界における中国人(漢人)と外国人の関係から、湘西における苗人と漢人との関係に思いを致し、「阿麗思中国游記」(1928)を取り上げ、「沈從文の民族性の文化身分は、基本的に上海の租界時期に明確になった。沈從文は上海の租界に住むようになって、初めて西洋文明に真に向き合うことになったのである。」とし、「阿麗思中国游記」及び「龍朱」(28)、「媚金・豹子・与那羊」(28)、「七個野人和最後一個迎春節」(29)、「神巫之愛」(29)、「辺城」(34)など苗族の民族性を称えた作品は、租界の体験が沈從文自身の文化血縁民族性に対する誇りを掻きたてたのであると述べ、沈從文の北京時代は回想の中の湘西を描いていたに過ぎないが、1928年の上海移住による租界環境こそが沈從文の苗族アイデンティティーをはっきりと目覚めさせ、

その自覚に基づいて湘西ものの創作意欲を掻きたてたのだという指摘は注目すべきだろう。その他袁国興、呂周聚、楊琳、張文東、席建彬、黄媛玲などが沈從文の作品論を発表した。また、周作人、朱光潜、老舍についても呉紅華、王攸欣、湯哲声などが発表した。日本からの三人の報告については紙幅の関係で割愛する。

③朱光潜・周作人に関するもの：王攸欣「論朱光潜之学術人格」を取り上げる。この論文は、後期京派の代表的理論家とされる朱光潜の学問とその風格を論じて、「朱光潜は独特な学問的風格を備えている。彼の一生は積極的に入世（実生活に入る）し出世（俗世間を超越する）はしない精神で、時代の文化思潮に呼応して、学術上のどの段階においても、主流をなす学術言説に努めて介入しつつも、権力言説とは遠近の差はあれ、できるだけある程度の距離を置くようにした—このような距離はしばしば権力言説の強制の程度によって決められた—彼は自らの個人的情感、個人的言説とその時代の学問的大環境と彼がおかれた小環境との関係を自覚的或いは潜在意識的に調整し、それと同時に主流をなす学術言説の枠内で独立思考を示そうと努めた。そうすることによって相対的に独立した学術価値を確立し、主流をなす学術言説からかなりの程度の認可を獲得した。」と述べ、朱光潜の学問的経歴を述べるとともに、時代の主流をなす学術思潮とどのように切り結び、権力言説とは距離を置きながら独自の言説を築いたかを述べている。また、朱が晩年には西洋美学研究で培った美学観をマルクス主義美学の中に保存しつつ、マルクス主義思想の実践論的言説を駆使して、1982年「在延安文芸座談会上の講話」40周年記念に際しては、公然と「資産階級自由化」を弁護した言説を取り上げて注目している。

最後に沈從文研究の第一人者凌宇氏が発言し、京派の命名については論争が行われ意味のある問題提起となったが、作家を無理に派別に帰属させる必要はないし、具体的な歴史状況の中で、本来の歴史の様相を原状に復元して、より全面的で豊かな理性的認識を獲得すべきであると指摘した。また、よりきめ細かな研究方法を重視すべきであるとして、例えば、比較文学の方法で、現代代散文の双璧である、魯迅の『野草』と沈從文の『燭虚』を比較・解読することができるのではないかと述べ、京派文学研究は広い理論的空間を有するので、今後の京派文学の学術研究の成長を期待する旨の総括がなされた。

注

- 1) 後日、小島久代「日本近期的沈從文研究」『中国文学研究』（湖南師範大学）2010年第3期所収。